

## 性の戦後史概略 -1950年～1980年-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2017-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平山, 満紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18793">http://hdl.handle.net/10291/18793</a>

[原 著]

## 性の戦後史概略—1950年～1980年

平山 満紀<sup>1</sup>

### 要 約

本論文は、1950年から80年頃までにわたる、日本における性の歴史を、性意識、性規範、性表現、性をめぐる知、性行動などを全体的に把握しつつ略述する。この時期西欧・米国では人々の主体的な変革としての「性革命」が起きたと見られているが、日本では「性解放」は起きたが性革命がほとんど起きなかった事情を見ていく。西洋的近代の性的表の公共性・公共空間と、前近代的な性習俗が形を変えた裏の公共性・公共空間が日本には存在し、その二つに男女が異なる振り分けをされた。裏の公共性・公共空間にあたる性産業ではこの時期サービス化を発達させ、男性は性的な願望を容易にサービスの形で実現できるようになった。夫婦の性のエロティック化はある程度進んだが、男女が異なる公共性・公共空間で性意識を形成しているため、コミュニケーションに多くの齟齬が生じ、エロティック化は限界に至った。男性は性の裏の公共性・公共空間を隠そうとする意識から、性についての公共の言論や性教育を忌避しがちで、男性目線の性情報は氾濫するが性教育や性の思想言論は極めて貧弱な状態にとどまった。

キーワード：性解放、性の二つの公共性、男女のコミュニケーションの齟齬

### 1. 本稿の問題関心と視角

現代の日本社会では、人々が現実の性関係に背を向けるようになっていくと多くの調査が明らかになっている。セックスレス、草食化などは日本社会では広く話題にされているが、しかしその問題化は問題解決をもたらすというより、言説の効果としてさらにこの現象を進行させ、人々は悪循環からの出口を見いだせていない。その原因は、日本人の性関係がはらむ困難—それは長年にわたり

形成された入り組んだもののようなが—の分析が不十分なこと、それにつながるが、現在提唱されている問題解決法が皮相的なこと、子ども時代からの性教育や身体コミュニケーションの機会の不足などが重なっていると考えられる。

一方世界的に見ると、社会現象として性関係が衰退している社会は、日本以外に知られておらず、セックスレス、草食化などは他の社会からみると非常に奇異な現象である。日本ではしばしば、「情

1 明治大学文学部心理社会学科准教授

報化で性情報が氾濫したために、特に男性が、生身の女性とつきあうのが面倒になった。」「女性の社会的地位が高まったために、女性達が不快な性関係を拒むようになり、セックスレスが起きている。」などと、情報化や女性の社会的地位の向上がセックスレスを帰結しているという議論がなされる。しかし現代世界の多くの社会で情報化や女性の社会的地位向上は起きているが、現実の性関係の減退は生じていないのであり、情報化、女性の地位向上そのものではなく、それと、日本社会特有の何かのファクターが結びつくことが、その衰退を引き起こすのだと考えなくてはならない。この日本社会特有のファクターとは、当然歴史的に形成されたものだが、それが何かを明らかにすることは、日本人の性関係がはらむ困難の分析に肝要だろう。

このような関心から、私たちは日本における性の現代史を広い視角をもって明らかにしたいと考える。本稿では紙面の限界もあるので、主として1950年代から1980年頃までを取り上げたい。この時期は、西欧や米国で、いわゆる「性革命」が起きたとされる時期にあたる。「性革命」については実証的、思想的研究は多く、従来その時期は1960年代～70年代と論じられてきたが近年ではより早い時期から先駆けはあり、より遅い時期まで余波があるという議論が出ており、本稿で取り上げる時期にちょうど相当する。<sup>2</sup>

西欧や米国では、「性革命」の評価はさまざまであっても、それが起きたことには、概ね共通認識が存在するようだ。一方日本では、1950年代か

ら80年頃までに「性解放」は進んだと言われるが、「性革命」が起きたと言われることはなく、「本格的な性革命を経験していない」<sup>3</sup>と論じられている。日本では、性と結婚を結びつける厳格な規範が緩み、人々の性意識や行動の自由度は増し、また性表現や性産業が大きく発達し、「性解放」は起きたが、人々が主体的に性の状況を変えようと企図し活動するという意味での「性革命」はほとんど起きなかったのである。そのことは今日の、性関係の衰退とも大きく関わりと考えられる。ただ、何を「性解放」と呼び何を「性革命」と呼ぶかは、比較社会研究を踏まえてより厳密に議論していくべきである。

西欧や米国と日本における性解放、性革命の比較研究を将来的には企図しつつ、本稿ではまず日本の性の戦後史の略述から手がけようと思う。1950年から80年頃までの、性意識、性規範、性表現、性をめぐる知、性行動を全体的に把握したい。本稿は粗略な概観にすぎないが、一近代以降の日本で表の性の公共がきわめて未発達だという本論の内容にも関わるが—性についての学問研究も未発達な中、学術的な研究としてはほとんど先例のないものだ。性表現、性風俗、性教育、若者文化、夫婦や家族など、性現象の個別の領域については、戦後史を描く試みはなされているが、性現象を概観しようとする研究は稀だと言える。

特に本稿が心がけた、また先行研究になかった視角を2つ挙げたい。一つ目は、男性にとっての性と女性にとっての性の両方を、複眼的に見ることである。『男性の見た昭和性相史』<sup>4</sup>『戦後性風

2 Eder FX, *Kultur der Begierde. Eine Geschichte der Sexualitaet*, Beck C.H. 2002

3 亀井俊介『性革命のアメリカ ユートピアはどこに』講談社, 1989

4 下川耿史『男性の見た昭和性相史 1, 2』第三書館, 1992, 同『男性の見た昭和性相史 3, 4』第三書館, 1993

俗体系 わが女神たち』<sup>5</sup>『性 妻たちのメッセージ』<sup>6</sup>など、男性目線、女性目線に貫かれた性現象の記録、記述は少なくないが、2種類の目線のベクトルの距離の隔たり、向きの違いこそが、性関係成立の困難を作ると考えられ、明確な把握が求められると考える。本稿では、双方の（男性集団、女性集団の中での多様性も含め）視線のベクトルのあり方そのものも視野におさめながら、男性目線から見られた性現象、女性目線から見られた性現象それぞれの相の違いを含めた、全体的把握をしようとした。

二つ目には、夫婦の性のような社会で公認された性現象と、婚外関係や性風俗のような公認されない性現象の両方を、視野に収めることである。両現象の領域の間には認識論的バリアが存在するため両方を見通すことは難しく、先行研究でも稀であるが、現実にはこの二つの現象は地続きであり、また相互に影響を及ぼしあっている。性の公認をめぐる規範は、研究者自身にも内面化され、非公認の性現象を直視することは内的な葛藤無しにはできないとはいえ、性規範の相対化と非公認の性現象の実証的な把握は敢行しようとした。

この2つの視角により、男性と女性、表の性と裏の性の2つの境界を超えて性現象を見通すことが可能になっただけでなく、従来の研究が見逃してきた領域間の影響関係を把握できるようになったことが、本稿のささやかな価値であろう。

## 2. 明治以前の性的習俗、近代的性規範、遊郭とその変遷、性の2つの公共性・公共空間

明治以前の性的習俗は、明治以降の近代化の過程で大きく変容していったが、その残滓はさまざまな形で1950年代以降の社会にもあった。そこでごく簡略にはあるが、明治以前の性的習俗と明治以降のその変容を描きたい。

江戸時代までの武士以外の階層では、性は神道と仏教の習合する宗教によって尊ばれ、性の享楽や欲望を悪いものと見ることはなく、童謡、民話、民謡にもセクシャルなものがふんだんにあった。祭りや共同体の行事には性的解放がとまない、青少年女達には共同体が性的初体験の儀礼や体験的な性教育をおこなった。共同体ごとのルールで夜這いなどもおこなわれ、婚外交渉には基本的に寛容だった<sup>7</sup>。

独身者が多く商品経済が発達した江戸などの都市では、遊郭が発達し、現実を忘れさせる娯楽の場、文化の発信地となっていた。上級の遊女は和歌や芸事の教養に秀でた人として尊重され、中下級の遊女も開放的な性的習俗を出身地の背景にもっているの、貧困を背景に人身売買された点で憐れまれることはあっても西洋的な意味の罪悪視をされることはなかった。<sup>9</sup>

明治以降、西洋社会から一夫一婦制の家族制度、婚外交渉を禁止する性規範、マスターベーションの害悪視などを含む性科学といった、従来とは全く異なる性の見方、規範、制度が、一部は儒教的規範と結びつきながら、導入された。性的習俗を

5 広岡敬一『戦後性風俗体系 わが女神たち』小学館文庫、光文社『宝石』初出1997→2007

6 グループわいふ『性 妻たちのメッセージ』径書房、1984

7 赤松啓介『夜這いの民俗学・夜這いの性愛論』ちくま学芸文庫、明石書店版1994→2004

8 池田弥三郎『性の民俗誌』講談社学術文庫、講談社『はだか風土記』1958→2003など

9 渡辺憲司『江戸遊女紀聞－売女とは呼ばせない』ゆまに書房、2013 石井良助『江戸の遊女』明石書店、2013 など

禁止する法律、条令が繰り返し作られ、祭りは警察が取り締まることもあった。男女の性のダブルスタンダードが導入され、特に未婚女性の処女性の重視、既婚女性の貞潔と性的節制が厳しく説かれるようになった。西洋的な知識に触れやすい、教育程度の高い階層からこの新しい意識は浸透していったが、下層階層や地方まで普及するのは第二次大戦後までかかった。明治以降禁止されていた、宗教的祭りの折の性の開放の集いは、1960年代にもごく一部であるが残っていた。<sup>10</sup>

江戸時代の公娼制度は明治以降も廃止されず、逆に伝統的な性的習俗が禁じられるのに代わって、全国に赤線・青線といった売春街が繁栄した。共同体の性的風俗がそこに形を変えて生き続けた面があった。たとえば、少年達の性的初体験を共同体の行事としておこなう代わりに大人たちが遊郭に連れて行ったり、共同体の性的解放の行事の代わりに男性が仲間たちで遊郭に行く、という行動様式ができたのである。戦後はGHQが公娼廃止指令を出し、女性の自由意志での売春以外は認められなくなったが、赤線・青線の売春街は存続し、売春防止法が1956年に成立した後も、売買春は禁止はされるが処罰の対象にはならなかった。

売春街は、男性達が接待や付き合いで足を踏み入れる、裏の公共空間だったといえる。男性の多くは大人になる上で、善良な市民として働き家庭を築く、表の公共性と、この裏の公共性を使い分ける能力を身につけた。一方女性は、表の公共性だけに生きる多くの素人と、裏の公共空間に生きるしかない玄人に分断されたのである。娼婦になる女性は、貧困、性的虐待、精神障害など多重の

困難を背負う人が多く、近代的な性規範が普及するほどに、逸脱者として差別視もされていた。日本人の性には表裏2つの異なる空間があり、多くの男性は両空間にまたがって生きているが、そのことは表空間では隠されている。裏の空間は公には無いこととされる。近代日本社会における、表の公共性と裏の公共性の二重性、性の2つの空間の存在は、性を思想や学問のテーマや社会实践の領域にすることを、難しくしてきたといえる。

性の二重の公共性・公共空間という概念は筆者のものだが、その発想は伊藤整の「近代日本における「愛」の虚偽」<sup>11</sup>の議論から得ている。伊藤整は、公式と実質という語で性に二重の公共性があることを表現しており、男と女は性に関して接する公共性が異なっているのに、「愛」という偽りの理念でその現実を隠蔽していると鋭く指摘する。伊藤は以下のように日本の性現象の構造を論じる。

「1958年度から日本では娼婦は廃された。しかし、男性が仕事をし、交際しているところの場所には、実質上の娼婦である酒場の女、女給、芸者がいるのであり、彼女らは自己を男性に売ろうとしてそばに待っている。男性は極めて容易にそれらの女性とすぐ触れる社会に生きているのだ。即ち公式的には永遠の「愛」というもので女性と結婚した男性は、実質的には仕事と交際において日夜、娼婦たちの中に混じって生活しているのである。結婚の公式と社会生活の実質とは、いちじるしく違い、女たちは公式を信じ、男は実質を信じている。」

キリスト教の背景のない日本では、愛という偽

10 藤林貞雄『性風土記』岩崎美術社、1967 礪川全次編『性愛の民俗学』批評社、2007

11 伊藤整「近代日本における「愛」の虚偽」『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫、1958（初出）→1981

りに満ちた言葉を使うべきではなく、江戸時代のような惚れた、恋したという言葉を使うのがふさわしい、と伊藤は主張する。伊藤の把握は、性の2つの空間の存在、男女のそこへの異なった配置、さらにそのことを隠蔽する理念の存在、という点で近代日本の性現象の構造を鋭く捉えていると言える。

### 3. 妊娠中絶と避妊の変遷

第二次大戦後のベビーブームが、日本でも1947～1949年に起こった。戦前の多産奨励の国策に代わって、復員などによる人口過剰や食糧難の状況において、合法的な妊娠中絶の道を開くため、1948年に優生保護法が制定され、経済的理由による妊娠中絶が認められるようになった。キリスト教国でない日本では、妊娠中絶への批判意識が形成されるのは遅く、女性達も半ば諦めの気持ちで中絶をとらえていた<sup>12</sup>。

1955年に国際家族計画会議が日本で開催されたのをきっかけに、「家族計画」という発想が広まり、婦人雑誌もこぞって記事を掲載するようになる。これ以降避妊の知識も徐々にではあるが普及し、性と生殖の分離が起きていった。しかし避妊の知識を各地で指導する受胎調節実施指導員らは1960年代も、妻の熟睡中に一方的に夫が行為をしてしまう「眠姦」など、男性の非協力ゆえの避妊の難しさを報告している<sup>13</sup>。

中絶件数を分子に、中絶件数プラス出生数（妊娠件数の近似値である）を分母にした中絶実施率の推移をみると、1955年は50%に近い。ここから

1967年に25%へと一直線に下降し、さらに1990年代に12%程度に半減する。1960年代前半までは、夫婦間でも産児制限の方法として、妊娠中絶は一般的だったと言える。

妊娠中絶の体験や、それが女性に強られる形での男女の性関係が、女性たちの性意識にどのような影響を与えていたのかは、深く探るべき問題だと考える。日本の女性たちにセックスへの恐怖や忌避感情を与え、セックスは早く引退したい義務という消極的な意味をもたせたことは大いに考えられる。母親のそのような性意識から、子世代も無意識に影響は受けるだろう。現代日本人の、性関係からの背忌にもつながる現象として、今後より実証的に調べたいと思う。

### 4. 性の表の公共性における言論

敗戦直後の1946年、Van de Veldeの『完全なる結婚』が翻訳紹介され、この後長きにわたり夫婦生活のバイブルとなっていった。戦後の男女平等の民主的家族関係をいかに築くかをめぐる社会的関心の高まりの中で、性についての公共的言論も表の公共性において、かなり盛んに行われるようになった。例えば、『夫婦生活』（1949年刊行～1971年廃刊）は医者、学者、小説家、ジャーナリスト、漫画家、画家などが執筆し、あくまで夫婦で読むために作られた月刊誌である。避妊法や性生活の知識などが多様な角度から語られ、文化的な豊かさのある雑誌である<sup>14</sup>。このような、男女が共有できる性の公共的言論はしかし、量的広がりにはきわめて限定的だった。性を扱うほとんどの

12 藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、2011

13 安田一郎『日本人の性行動』講談社、1966

14 松沢呉一『エロスの原風景 江戸時代～昭和50年代後半のエロ出版史』ポット出版、2009

雑誌は男性向けだった。一方婦人雑誌などには女性向けに、避妊や妊娠出産などに限って性についての記事は掲載された。性の言論の大多数は男性向け女性向けに分断され、男女それぞれが、視点、言葉、目的、内容の全く異なる言論に接することがほとんどだった。これは現在に至るまで大きく変わっていない。

1960年に刊行された謝国権の『性生活の知恵』<sup>15</sup>は、男女双方に向けた数少ない例である。これは性交体位を、あやつり人形のような男女の模型で示すという直接性を避けた表現や、科学的な文体が受け入れられ、大ベストセラーになった。これは「性と生殖の分離」を明確に打ち出していることでも画期的な著書である。この中で著者は女性達の性知識のなさ、性への忌避感の強さを繰り返し問題にしている。たとえば、「男性に「良かったか」と問われても、「わからない」と否定するのが、女性の身だしなみだけに考えている者が、相当多い」とし、快感を得たら女性も素直に反応するのが良いと説いている。

さて1950年代半ばに輝かしく誕生した若者文化は従来の性規範に対し衝突していたが、それに親近感をもつ若い男性にとって、若者文化の本格的なメディア『平凡パンチ』の奈良林祥のコラムは、数少ない本格的なセックスのテキストとなった。1965年に創刊されたこの月刊誌は「車」「女」「ファッション」を編集の三本柱とした。若者が知りたがっていた、風俗レポートではない、男女関係やセックスについての記事を奈良林が連載し、解剖学や生理学の正しい知識、性とは何か、男女がともにセックスを作り上げていく心構えな

どを伝えた<sup>16</sup>。一方、この時代女性が接触できる性の公共的言論はほとんどなかった。

米国留学で公明正大な公共的言論としてのセクソロジーや性教育に触れ、大きな意識改革を遂げてきた奈良林は、性を表の公共性において語れる数少ない論者だった。彼は日本初の結婚カウンセリングクリニックを始め、彼の他にはほとんど現れなかったセックスカウンセラー、セックスセラピストとして40年間にわたり活躍するかたわら、文筆、講演会、性教育講座を積極的におこなった。1968年以降はTV番組で性教育のコーナーをもったことも、性についての知を公共の場に出す、数少ない貴重な活動だったといえる<sup>17</sup>。

このように、男女が共有できる性の公共的言論は、戦後家族の新たな性秩序の形成という社会的必要のもとで、小規模ながら成立したが、ごく少数の論者に頼る状況であり、啓蒙的な内容を越えた社会的議論は起こりにくかった。これは今日に至っても基本的に変わっていないのである。

## 5. 高度経済成長と母子関係中心の家族

明治時代以降、子どもを養育する責任者として母の重要性が強調されていったが、戦後はさらに、母の社会的価値の認識が社会に広まった。母の自己犠牲はしばしば神聖視もされ、母として生きることは女性の最高の幸せとされた。それは裏から見ると、女性が女として性的に生きることの貶価である。1955年以降の経済成長と並行して、核家族化、専業主婦化が進むが、その形態の家族において母子密着の関係が中心を占め、女性達にとって子どもとの一体感や、子どもを通じた達成感は、

15 謝国権『性生活の知恵』池田書店、1960

16 マガジンハウス編『平凡パンチの時代』マガジンハウス、1996

17 奈良林祥『愛と性を説いて五十年』中公文庫、1996

夫との関係よりも充実したものとなった。夫婦の役割分業も画然とし、家事育児をしない夫は家にはいないほうが妻には楽だと考えられるようになった<sup>18</sup>。男性が家庭の責任を心配せずに仕事に邁進でき、子どもが母から手厚い世話を受け母の期待に応えようとするような、母子関係中心の家族が、日本の高度経済成長を支えていたのであるが、この家族が性的な要素を欠いていることに女性が不満をいだかない限り、この家族は女性にきわめて居心地がよいものだった。

## 6. 夫婦のセックスのエロティック化とその限界 (1)

少なくとも戦後間もなくは、夫婦のセックスはきわめて男性中心のどかつ素っ気ないものだったようだ。1949年調査の結果を収めた篠崎信男『日本人の性生活』では、夫婦のセックスは「前戯・後戯ともになし」が39.8%にものほり、多くの夫婦で男性の射精だけが目的と言ってよい内容だった<sup>19</sup>。日本でキンゼイ報告と同様の調査を精力的におこなっていた福岡武男も、1954年の著書で次のように述べている。「日本人の夫婦の性習慣としては、(ヴァン・デ・ヴェルデの言う前戯やキンゼイの言うパッティングを意味する)愛撫動作は、いちゃつきとして娼婦的性愛技巧として考えられている。いわば遊びであって、娼婦や芸者のすることで、夫婦はもっとあっさりとしなければならぬとしていた。」<sup>20</sup>そのような状態から、西欧や米国の文献の影響を受け、日本の夫婦の

セックスはエロティック化していったといえるようだ<sup>21</sup>。

その後のエロティック化であるが、1965年調査では、前戯をおこなう割合、セックスの時間(平均時間18.1分)ともに増加している<sup>22</sup>。さらに1982年共同通信の調査では、高学歴で地位の高い男女ほど前戯に積極的になり、セックスの平均時間は21～25分にまで伸びた<sup>23</sup>。ごく表面的にみただころでは、夫婦の性のエロティック化は戦後、進展しているのである。

## 7. 文学、画像、映像などの性表現とそれへの規制の変化

D・H・ロレンス著の『チャタレー夫人の恋人』が伊藤整訳で刊行された1950年、猥褻文書頒布のかどで伊藤整と出版社社長は起訴され、多数の文学者が証人として出廷して伊藤を擁護し、大きな事件となった。1957年最高裁で有罪判決が下されその後の裁判に影響を与えることとなる。その後マルキ・ド・サド著、澁澤龍彦訳『悪徳の栄え』が1960年押収、1969年記者有罪となり、1970年代も野坂昭如「四畳半襖ノ下張」、大島渚『愛のコリーダ』(映画のスチール写真の単行本)も摘発、有罪判決を受けた。そのつど、「猥褻とは何か」が問われ社会的議論を呼んだ。

しかし1960年代後半、とりわけ1970年代の性情報の爆発的増大と、社会意識の変化をうけて判決は変化していく。1973年『チャタレー夫人の恋人』完全訳が羽矢謙一訳で出された時には、当局は取

18 平山満紀『母性社会の行方』紀伊國屋書店、2010

19 篠崎信男『日本人の性生活』文芸出版、1953

20 福岡武男『キンゼイ報告と日本女性の性行動』春陽堂書店、1954

21 ただし、夫婦のセックスがあっさりしたものであるべきだとする規範や現実が、いつから、どの地域で、どの階層においてあったのかは、さらに調べる必要がある。

22 安田一郎『日本人の性行動』講談社、1966

23 石川弘義・斎藤茂男・我妻洋『日本人と性』文藝春秋社、1984

り締まることはなかった。さらに『四畳半襖の下張』の1979年に下された判決では、作品の支配的効果が性についての真摯な思想表明にあって好色の興味に訴えるものではないと評価されるものは、猥褻文書にあたらないとし、『チャタレー』『悪徳の栄え』を猥褻とするのには疑問があるとまでしている。

つぎに画像、映像における性表現への規制の変化をみていこう。写真、印刷、映像技術の向上を背景に、1960年代後半にはポルノ画像や、ピンク映画と呼ばれるポルノ映画が社会の表に大量に流通した。日本での「性解放」の主要な要素は、この性情報の増加と表現の抑制の緩和および、9項で述べる性産業の隆盛だといえる。

1965～1990年、TVの深夜番組『11PM』は平日の夜の男性向け番組で、長期に亘り人気を博した。曜日により、女性レポーターが全裸に近い姿で温泉の取材をしたり、男性レポーターがトルコ風呂などの性産業を取材するなどの企画があった。1970年代には他局も深夜の男性向け番組の競争に参入し、刺激の強さを増していった。

1972年から日活ロマンポルノが制作・配給され、性器を映さないという規制の中であるが、大量にポルノ映画を社会に送り出していく。低予算で月6本ずつ公開という量産体制であり、セックスシーンを適宜入れれば日活から製作者たちへの規制は少なく、若手監督たちに実験の場を与えることにもなった。

ポルノ画像はさらに新たな形態、販売方法で流通していった。1970年代後半には粗製濫造されたグラビア本を売る（客は表紙とタイトルだけを見て購入する）自動販売機が全国に置かれ、1980年

代始めにはビニール袋にパックされたビニール本というグラビアが売られるようになった。これは下着やレースを通して性器が透けて見えるものである。

これらのポルノの流通拡大は社会の表舞台で行われたが、しかしあくまで性質としては裏の公共性のもので、どんなにそれが増大し表に溢れ出ても、男女ともに担う表の公共性で性が堂々と話され考えられることは起きなかった。

## 8. 性教育へのとまどい<sup>24</sup>

文部省は戦後、性規範の混乱、私娼の増加を防ぐ目的で、「純潔教育」を始めた。この言葉は、1947年～1972年の25年間「性教育」の代わりの語として使われた。純潔教育の名による性教育は、男女間の道徳の確立などを重視し、性については月経や売春、性病の問題などきわめて限定した知識しか提供しようとしなかった。社会に性情報が増加する1955年以降は、このような文部省の現実離れした発想の性教育は沈滞する。性情報が爆発的に増大する1970年代によりやく性教育の必要性が論じられるようになり、日本性教育協会など専門の組織も文部大臣認可で作られたが、学校で性を教えることに抵抗を感じる教育関係者が大多数なのは変わらず、人間教育としての詳細な性教育は、現在に至るまで日本では行われていない。

1960年代70年代に西欧で進んだ性教育については調査や見学がされ、日本にも取り入れようとする動きもあったものの、十分に実現しなかった。例えば、デンマークで1968年に、高校生向けの性教育読本として刊行されたクレーソンの『少年と少女・男と女』は、全裸の男女がセックスをして

24 斎藤光「男女の交際と礼儀の基礎研究」『京都精華大紀要 33号』

いる写真や、コンドームの付け方の写真など、包み隠さず詳細に記述したもので、世界各国で翻訳されたが、1969年に写真などをカットした上で日本語訳を刊行したところ、3年で10万部が売れた一方、各地の教育委員会が、刺激が強すぎて生徒に悪影響を与えると猛反対をして、出版打ち切りになった。日本性教育協会が1972年、機関誌『性教育研究』にスウェーデンの性教育教材『きみとほくのいのち』を紹介した時も、原典にあった出産シーンの写真を、猥褻文書になるおそれがあるという理由で削除するという自粛をおこなった。

こういった例は枚挙に暇がなく、ポルノが氾濫し性産業が隆盛する一方で、性教育にはつねにブレーキがかかるという構造が日本ではある。性教育が社会的に推進された西欧からは、しばしばこれは不思議がられる。これは性の裏と表の二つの公共性領域の存在を認識して初めて分析できる現象だと考える。日本では前近代における民俗的性慣習が裏の公共性領域に残存し、さらに近代化の中で発展したため、性の裏の公共性領域は産業的にも文化的にも非常に大きいのである。しかしそれはあくまで隠すべき、うしろめたい、恥ずかしいものであり、教育のような表の公共性の領域に持ち込めるものではないとされる。さらには、子どもに性の知識を教えると、裏の公共性への興味を喚起してしまうという恐れを大人はもち、また大人自身が表の公共性で堂々と語れる性の体験や知識をもたず、大人の男性はそれをもたないために秘密裡に裏の公共性に関与しているという事情もある。こうしてこの構造は再生産されてしまうのである。

## 9. 1960年代後半からの性産業の隆盛

1964年の東京オリンピック前は風俗店への取り締まりが強化され、店数も減っていたが、オリンピック後に再増し、各店はサービス技法の発達や女性のマナーの管理に努めるようになった。男性が完全に受け身となって、細やかな性的サービスを買うという図式が出来、普及していく<sup>25</sup>。

1969年トルコ風呂に「泡踊り」が登場、性サービスがこのころから加速していく。

1971年滋賀県雄琴という田園にトルコ風呂1号店が誕生し、一晩中ネオンが光り続ける特異なトルコ風呂街として隆盛していく。1972年全国のトルコ風呂は1000店を突破。大衆週刊誌やTV深夜番組で、サービスの情報が掲載され、客を増やすという循環ができた。東南アジアからの出稼ぎ女性も性産業に増えた。60年代後半からの日本の「性解放」は、このような、第三次産業の急速な発達の時代におけるサービス化と情報化に支えられた性産業の発達を、主要な要素としている。

雄琴のある若いトルコ風呂経営者が、興味深い発言をしている。彼は学生時代反体制運動に関わっていたようで、「はかないことですが、トルコ風呂に遊びにくることは、ひとつの抵抗の形になるのじゃありませんか。」と述べている<sup>26</sup>。人間らしい性の追求が反体制運動と直接に結びつきえた西欧や米国との対比が際立つ発言であろう。

1970年代のトルコ風呂では、「ウーマンリブの影響が多いにある。」と現場の店長らは感じていた。男性客に、徹底的に女性に奉仕させようとする要望がかえって強まる傾向があったという<sup>27</sup>。リブは男女の対等なエロスを希求していたが、男

25 広岡敬一『トルコロジ』晩聲社、1978 佐野眞一『ニッポン発情狂時代』ちくま文庫、文藝春秋社『性の王国』1981→2000

26 広岡前掲書、64頁

27 同上、65頁

性が女性の主張に自分を脅かすものを感じたのか、男性の一方的な願望を女性が満たす性サービスが一層発達するという皮肉な結果をうんだ。しかもそれが公然とは語れない裏の公共性空間で発達したことは、夫婦やカップルが性関係をよくすることに取り組むのを難しくした。

性産業で働く女性たちは、ほぼすべてが、貧困、借金を負っている、安定した家庭で育っていない、知的障害や精神障害、性的虐待を受けた、性犯罪の被害者などの、（さらにこれらの要素が重なった）困窮者たちだった。社会的差別を受けステイグマを負う人も多く、一般の仕事に就けず、収入はよいが蔑視されるこのような仕事に就いていた。1980年代以前は、堅気の女性と水商売の女性の間は明確に分断されており、性規範や性意識、性行動には大きな違いがあった。

彼女達は確かに後ろ指をさされ、性産業は表向けには目を背けられたが、社会から完全に侮蔑されるということはなく、差別されながらも男性の夢を叶える人として有り難がられ、持ち上げられることもあった。

## 10. 日本の反体制運動における性の位置づけ

日本は敗戦後米国の政治経済社会文化全般の強い影響を受け、それへの批判は冷戦構造下ではマルクス主義思想を核にして形成された。1960年代後半の日本の反体制運動は、70年安保という政治課題を抱えていたためもあって一層、マルクス主義思想の色が濃いものだった。マルクス、レーニン主義の革命思想の、固く抽象的な理論で武装した、「男らしく闘争する」という文化が、反体制

運動の担い手には受け入れられていた。そこには性やエロスを思想や運動の問題と捉える発想は殆どなかった。この点、1960年代からヴィルヘルム・ライヒの性革命についての思想、ヘルベルト・マルクーゼのエロスの文明的議論などが読まれ、女性解放運動が大きくなうねりを起こしていた西欧や米国とは大きく異なる。パリ5月革命も、大学女子寮への男子訪問解禁の要望がきっかけになったのであり、ジェンダー、性関係、エロスにおける変革は政治的変革と相伴っていた<sup>28</sup>。

日本の思想の中では、吉本隆明『共同幻想論』1966年は、人間の全幻想領域の固有な一部として、男女関係、性、家族に相当する「対幻想」という領域を考えだし、性に思想的に焦点を当てた稀な例だったといえる。

大学を舞台とした全共闘運動は1969年機動隊に鎮圧され、新宿などの街を舞台とした闘争も抑えられて、1970年には、政治闘争としての反体制運動は一気に下火になった。1970年代には、政治闘争の失敗の後、反体制運動の焦点を文化や社会の変革に定める人達も現れ、行くあてを失っていた一部の若者の心を、折しも翻訳が刊行されたヴィルヘルム・ライヒ『性革命』<sup>29</sup>（部分訳刊行1969年、全訳刊行1970年）が捉えもした。

「Love and Peace」「Make Love Not War」等はフレーズとしては広く知られたが、若者文化の記号以上の、思想やライフスタイルの表現として理解した人は、ヒッピーコミュニティに集まったような少数者にとどまったようだ。

「多くの思想家は、セクシュアリティに革命実現の希望を託してきた。」<sup>30</sup>（アンソニー・ギデ

28 60年代70年代の反体制運動における性の位置づけの各国比較は今後、より詳細に実証したい。

29 W・ライヒ、中尾ハジメ訳『性と文化の革命』勁草書房、1969 W・ライヒ、小野泰博・藤澤敏雄訳『セクシュアル・レボリューション 文化革命における性』現代思潮社、1970

30 アンソニー・ギデンズ『親密性の変容』而立書房、1995、11頁

ンズ)ということは日本では起こらなかった。例えば真木悠介『人間解放の理論のために』<sup>31</sup>(1971)は、人間解放の全体理論を目指して著されたが、性には全体理論のうちごく些末な部分しか与えていない。

20世紀における歴史的転換点だと言われている1968年前後の意味と可能性を再検証する試みが、それから40年を経た2008年前後には世界各国で盛んになった<sup>32</sup>。各国での68年前後の出来事の差異や多様性と、同時代的な共通性が浮かび上がるのだが、性において何が起きていたのかの社会比較研究も重要な課題だろう。

## 11. 新たな家族と性を求めた恋愛結婚と同棲 家族と性の実験は少数

70年代には戦後ベビーブーマーが20代半ばを迎え、日本は史上最大の結婚ブームを迎えた。結婚の潮流は、お見合い結婚から恋愛結婚へ一直線に進んでいたが、70年代前半は恋愛結婚の比率の伸びが特に大きい。

恋愛結婚の増加だけでなく、制度的結婚ではない同棲という男女の関係も、盛んになっていた。1972～73年に連載された漫画作品『同棲時代』(上村一夫作)やフォークソング「神田川」(1973)も同棲の潮流を勢いづけた。結婚においては、男女の年齢差が縮小し、友達結婚と呼ばれる対等な結びつきになった<sup>33</sup>。その家族は、制度や役割に寄りかからずに平等な関係性を重視する新しい意識で形成される傾向があり、従来とは異なる

「ニューファミリー」と呼ばれた。

一夫一婦でない形の男女の結びつきを試行するコミューン、一妻多夫の実践なども70年代の家族と性の実験として現れたが、数としては多くはない。オープンマリッジの試みはごく稀だったと言える。日本は戦前まで一夫多妻が認められ、戦後は制度としての一夫一婦が導入されたが、周囲が調えた見合い結婚での役割夫婦が一般的だった。むしろ当時は恋愛結婚による対等な一夫一婦の夫婦関係を探究することの可能性が人々には大きく映ったのだろう。

子育ての共同、つまり核家族での孤立した子育てを脱して共同保育をおこなうことの方が、共同性の追求の比重としては高かった。

スワッピングは一時的な性関係を結ぶにとどまるので、日本の伝統的な祭りの日の性的解放の風習とも近いからだろうか、一時は少くない人の関心をとらえた。夫婦交換のための情報誌は1955年に創刊されたが、それが発展した『ホームトーク』誌と類似の雑誌とを合わせると、1979年には公称計10～15万人の読者がいたという<sup>34</sup>。

## 12. ウーマンリブ(女性解放運動)の希求した 性とエロス<sup>35</sup>

男性と共にする政治闘争によって女性も解放される、という期待を裏切られた女性達は、男性中心の運動が挫折した1970年、欧米の運動を伝え聞いて刺激を受け、マルクス主義にベースをおかない女性解放運動を誕生させた。10代から70代の幅

31 真木悠介『人間解放の理論のために』筑摩書房、1971

32 アラン・パディウ他『1968年の世界史』藤原書店、2009など

33 佐藤文明『ウーマンリブがやってきた』インパクト出版会、2010

34 下川歌史『男性の見た昭和性相史 3』第三書館、1993、206～207頁

35 西村光子『私たちの共同体 70年代ウーマンリブを再読する』社会評論社、2006 秋山洋子『リブ私史ノート』インパクト出版会、1993 天野他編『新編日本のフェミニズム1 リブとフェミニズム』岩波書店、2009ほか

広い、非常に多様な女性達が女という共通項で引き寄せられた。リブと呼ばれるこの運動で女性達は集会を重ね、女性であるゆえに抱えるあらゆる種類の問題を語り合い、社会に訴えた。運動の拠点、新宿リブセンターは男性を排除した女性達の共同生活の場でもあった。男性が主導し女性が追従する従来の性役割を繰り返さず、女性達が自律性と仲間の絆をつむぐために、女性だけの集団で生活や活動することを選んだのだが、その地点から、男女の関係の改善に展開するのは、きわめて難しかった。リブは男性中心のマスメディアで、「ブス女のヒステリー」などと徹底的にからかわれ戯画化された。その歪んだ表象が、リブの主張を男性が正面から受け取ることを一層困難にした。

リブの女性たちは、家父長制と一夫一婦制が女性性を抑圧しており、女性の解放とは本質的に性の解放だと考えた。性の解放とは、風俗的な性の自由化とは異なると強調され、女性の性の意識の改革を意味した。女性たちは、性についてあからさまに話すことがはしたないとされていた時代に、懸命に性を言語化しようと試みを重ねている。彼女たちは、当時の日本でほとんどなかった、性を語る公共空間を、しかも多くの女性達が参加するものとして、作りあげたのである。性器的エロスではないエロス、性の主体となること、女性同士の関係性を軸に男性や子どもとのエロスの関係性を追求していく道などを、理念的ではあったが、盛んに論じた。一対の男女に閉じない集団的エロスも模索された。

アン・コートの「膾オーガズムの神話」などを含む1970年米国の女性解放運動論文集も、翌1971年には日本語訳が刊行され、反響は大きかった。

リブの主張は、「エロス」という語を好んで使っ

た。たとえばリブの理論誌のひとつは、『女 エロス』というタイトルである。ではそのエロスの語を、彼女たちはどんな意味で使っているのか？それは今日の感覚からすると意外なくらい広く、セックスとの直接の関係が薄いものだ。いわば、「身体的直接性における親和性」のような意味であり、子育て、共同性、出産を語る時にもしばしば使っている。エロスの語で「男女の性」に焦点を当てることは、相対的に少なかった。本当は彼女たちはもっと、男女のセックスに焦点を当てたかったのだが、誰も語り慣れないため、心理的な抵抗感が強くてそれができなかったという事情もあるのだろうか。また、当時の男女関係や夫婦関係では、男性が女性に優しい言葉をかけたり、いたわりのしぐさをしたり、セックス以外での肌の触れ合いやキスなどはきわめて乏しく、彼女たちは、現実のセックスから欠け落ちていた要素、コミュニケーションや関係性における漠然とした不全感を何とか言葉にしようとしたのかも知れない、とも考えられる。

リブの最大の焦点は、優生保護法改正（中絶禁止）に対する阻止闘争だった。経済成長を背景にした労働力不足を解消しようとする政権と、中絶反対を訴える宗教団体が結びついて、優生保護法から経済的理由により中絶が認められるという条項を除こうとする、つまり多くの妊娠中絶を非合法にしようとすることに、リブは反対したのである。これは大きな社会的議論の末、廃案となった。ピルについては、日本では医師の処方なしに入手できない状態から、販売の自由化を求めてリブの一部の人が独走する形で運動を進めたが、その運動が興味本位な社会の耳目に訴えるものであり、また当時のピルに副作用が大きかったために多くの女性は使用を選ばず、この運動は頓挫した。性

病が広まることへの警戒や、女性が主体的に避妊することへの男性の抵抗もあり、ピルは現在に至るも日本では販売の自由化はなされていない。

### 13. 結婚と性の結びつき

未婚者のセックス経験率は、戦後から20世紀の終わりまで一貫して上昇していった。これも日本における性解放の主要な要素である。具体的に数字を見てみよう。

1948-49年、18～22歳学生（未婚者）のセックス経験率は、男性13.8%、女性4.9%だった<sup>36</sup>。1965年、20代～50代既婚女性で都市在住者の調査で、結婚前に夫以外とセックスをした人は、6.8%。年代による違いは見いだせなかったという<sup>37</sup>。

1982年、既婚男女のうち、結婚前に配偶者以外とセックスをした人は、管理職男性58.8%、管理職男性の妻8.7%、一般男性67.2%、一般男性の妻19.9%であった<sup>38</sup>。

1983年、既婚女性『わいふ』誌読者の調査。この読者層は一般に比べ、比較的高学歴で、有職者の割合も高い。結婚前に夫以外とセックスをした人は、20代35.2%、30代38.7%、40代以上30.0%<sup>39</sup>。同調査によると、女性の初体験年齢は、20代平均20.6歳、30代平均21.5歳、40代平均22.5歳と、10年で約1歳ずつ若くなっていることもわかる。

NHK放送文化研究所による「現代日本人の意識構造」調査から、婚前交渉についての結果を見ると、世代別の差が大きいことがわかる。男性では1920年代後半生まれの世代から、結婚と性を厳

格に結びつけて考える割合が急に減少しはじめ、1937年前後生まれで、結婚外の男女の結びつきとして性を解放的に認める人は厳格派と多数を交代する。女性も、性を厳格に考える割合は1920年代後半生まれ以降に減少するが、多数派の交代は1945年前後生まれである。性に対する考え方は、若い時は開放的で加齢とともに厳格になるのではなく、その人がどのような性規範をもつ社会で青年期を送ったかで、ほぼ決まってくるのが、この調査の範囲では言えるとしている<sup>40</sup>。

### 14. 夫婦のセックスのエロティック化とその限界（2）

1982年の共同通信による調査でセックスの満足度を聞くと、夫の6割以上が「いつも満足」であるのに対し、妻は「不満が残る（いつも+しばしば+時には）」が「いつも満足」を上回っている<sup>41</sup>。夫婦のセックスのエロティック化の進行について先述したが、それには限界があった。妻の不満、夫婦のすれ違いがあることがうかがえる。それは具体的には何だったのか？

既婚女性向けの雑誌『わいふ』は1976年に小規模な調査をした際、女性たちが性的な面の苦しみは正視できないのか、言語化にブレーキをかけるのか、不満をはっきりと語る妻はごく少なかった。それと対照的に、7年後の1983年調査では、多数の妻達が性生活の不満を自由回答欄にオープンに語るようになった<sup>42</sup>。この間に驚くほど大きな意識変化が妻たちに起きたのである。

36 朝山新一『現代学生の性行動』白井書房、1949

37 安田一郎『日本人の性行動』講談社、1966

38 石川弘義・斎藤茂男・我妻洋『日本人の性』文藝春秋社、1984

39 ぐるーぶわいふ『性 妻たちのメッセージ』径書房、1984

40 NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造 第4版』NHKブックス、1998

41 石川弘義他前掲書

42 ぐるーぶわいふ前掲書

1983年調査における、妻の不満の内容を項目にまとめると、圧倒的多数は、「夫が積極的すぎる」であった。逆に、夫から言われたことのある不満の最も多いものは「妻が消極的すぎる」であった。つづく妻の項目別不満は、多い順に「夫の一人よがり（回数の多少や持続時間よりも、セックスでの夫のいたわりのなさ、一方的な態度）」「自分は性の処理場ではない（排泄に似ている）」「いやがることを押しつける（特にオーラルセックスとアナルセックスが争点）」「セックスでけんかの決着はつけられない」「行為そのものがうまくいかない」だった。

また、セックスではないより広い日常的愛情表現をどのくらいおこなっているかの質問では、「キスをする」が戦後のベビーブーマーを含む30代で27.0%、ほぼ戦前生まれが占める40代はずっと少なく6.7%、20代は37.0%であった。また、抱きしめる、愛撫、手を握る、体を触れあって座る、愛していると言うなどは、いずれもキスより少ない割合しかなかった。日常的愛情表現は若い世代で増えてはきているがきわめて限定的だった。40代では「何もしない」が最多の38.3%であり、その中でセックスがなされていた。妻たちが夫に求めることは、「疲れたときいたわってほしい」「ゆっくり話を聞いてほしい」などが上位だった。

ちなみに夫とその母との関係を尋ねると、夫と妻の関係以上に濃密で一体感が強い場合がおよそ5分の1あり、そういう夫婦は性生活に問題を抱える割合が高かった。

男性は性に積極的、女性は性に消極的であるように社会的に求められ、女性は不十分な性知識を

得る機会しかもたないこと、男性は日常的な愛情表現や共感と別のものでセックスをとらえ、妻に対し言葉でも態度でもきわめて貧弱な愛情表現しかしていないことが、夫婦の性の積極性のずれにつながったとみることができる。さらに夫たちはしばしば、性産業のサービスを買った体験を、夫婦に持ち込んで妻にサービスを要求し、妻の不満をかっていることも『わいふ』調査などで語られている。このような夫婦のずれ違いは、女性達が自分の言葉で性を語るウーマンリブの活動を経た80年代に、ようやく女性達によって語られるようになってきた。

夫婦のセックスのエロティック化の限界を、この後の時代にも男女が乗り越えることに失敗したことが、現在のセックスレスにつながると予想できるが、それは改めて実証したい。

## 15. 欧米の性革命に対する反応

1960年代70年代に、同時代の欧米の性革命の状況は断片的に日本に伝えられ、興味本位な解釈をされることが多かった。その象徴的な言葉は「フリーセックス」という和製英語で、60年代半ばに使われ始めたらしい。これは結婚にこだわらないセックスという意味として使われだしたが、大衆的には不軌奔放なセックスという意味となり、スウェーデンやデンマークが「フリーセックス天国」と妄想されるようになった。

性革命を現場で観察または体験した、かなり本格的な報告もいくつかある。立花隆『アメリカ性革命報告』（1979）<sup>43</sup>、上前淳一郎『世界の性革命紀行』（1979～連載）<sup>44</sup>、我妻洋『性の実験』

43 立花隆『アメリカ性革命報告』文春文庫、文藝春秋社刊1979→1984

44 上前淳一郎『世界の性革命紀行』角川文庫、講談社刊1980→1983

(1980)<sup>45</sup>、亀井俊介『性革命のアメリカ ユートピアはどこに』(1989)<sup>46</sup>などである。著者達は、日本との相違をどうとらえ、それをどのような社会・文化の違いに由来するととらえていただろうか。

西欧社会が、性のすべてを包み隠さず公に議論したり教育するようになったことを、驚きつつ報告しながらも、「日本人の感覚の繊細さは、四畳半の秘め事を白日のもとにさらすのに耐えられない」「性にはつつしみ深い恥じらいの気持ちを残しておいたほうがいい」とメンタリティの違いのために日本では同じことはできないだろうと予測し、それでよいとする議論を、上前淳一郎はしている。米国については我妻洋は、キリスト教の拘束力が強いがためにそれへの挑戦も烈しくなり、また極端な個人主義と競争心のために根深い孤独感をかかえ他者との結びつきをも求めてあがいている、という捉え方をし、日本で同じことは起きないだろうと予想する議論をしている。米国での性革命について亀井俊介は、完璧な性関係を求めようとする、ピューリタンの伝統が基礎にあり、日本とは宗教的土壌が違うとみる議論を展開している。当時のこれらの論者たちは、日本人の性関係や性の文化に対する危機意識を抱いてはおらず、日本では欧米の性革命の真似はしなくてよい、という論調となっているといえる。女性の論者ならば異なる議論を展開しただろう。

1980年代以降、日本人の性関係や性の文化に対する危機は認識され始めるが、性の2つの空間の存在、女性の母役割の評価、男性が望む通りの性的サービスを性産業で受けられる、などの本稿で

指摘した状況は基本的に変わらなかった。さらに情報化による性情報の氾濫、女性の社会的地位の向上などで危機は顕在化、意識化はされるようになり、現在ますますそれは強まっている。欧米の性革命とは形は異なるが「人が主体的に性の状況を変えようと企図し活動する」という点ではこれと共通する、性革命が日本でこそ必要だという考えに、賛同する人も多いのではないだろうか。

本稿は概括的な粗述にすぎず、今後はこの時代の日本の、多様な人々の多彩な性を詳細にとらえ描いていきたい。それと共に同時代の欧米諸社会における性現象と日本のそれとを比較しつつ、性解放はあっても性革命は起こさなかった日本社会の特有の条件を、より精緻に把握することも次なる課題である。

#### 参考文献

- 赤松啓介『夜這いの民俗学・夜這いの性愛論』ちくま学芸文庫、明石書店刊1994→2004
- 秋山洋子『リブ私史ノート』インパクト出版会、1993
- 朝山新一『現代学生の性行動』白井書房、1949
- 天野他編『新編日本のフェミニズム 1 リブとフェミニズム』岩波書店、2009
- 池田弥三郎『性の民俗誌』講談社学術文庫、講談社刊『はだか風土記』1958→2003
- 石井良助『江戸の遊女』明石書店、2013
- 伊藤整『近代日本における「愛」の虚偽』『近代日本人の発想の諸形式』1958（初出）→1981、岩波文庫
- 石川弘義・野口武徳『性』弘文堂、1974

45 我妻洋『性の実験』文春文庫、文藝春秋社刊1980→1985

46 亀井俊介『性革命のアメリカ ユートピアはどこに』講談社、1989

- 石川弘義・斎藤茂男・我妻洋『日本人の性』文藝春秋社, 1984
- 上前淳一郎『世界の性革命紀行』角川文庫, 講談社刊1980→1983
- NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造 第4版』NHKブックス, 1998
- ぐるーぶわいふ『性 妻たちのメッセージ』径書房, 1984
- 亀井俊介『性革命のアメリカ ユートピアはどこに』講談社, 1989
- ギデンズ, アンソニー『親密性の変容』而立書房, 1995
- 斎藤光「男女の交際と礼儀の基礎研究」『京都精華大紀要 33号』
- 佐藤文明『ウーマンリブがやってきた』インパクト出版会, 2010
- 佐野真一『ニッポン発情狂時代』ちくま文庫, 文藝春秋社刊『性の王国』1981→2000
- 篠崎信男『日本人の性生活』文芸出版, 1953
- 下川耿史『男性の見た昭和性相史1, 2』第三書館, 1992,
- 『男性の見た昭和性相史3, 4』第三書館, 1993
- 謝国権『性生活の知恵』池田書店, 1960
- 立花隆『アメリカ性革命報告』文春文庫, 文藝春秋社刊1979→1984
- 奈良林祥『愛と性を説いて五十年』中公文庫, 1996
- 西村光子『女たちの共同体 70年代ウーマンリブを再読する』社会評論社, 2006
- バディウ, アラン他『1968年の世界史』藤原書店, 2009
- 平山満紀『母性社会の行方』紀伊国屋書店, 2010
- 広岡敬一『トルコロジー』晩聲社, 1978
- 『戦後性風俗体系 わが女神たち』小学館文庫, 光文社『宝石』初出1997→2007
- 福岡武男『キンゼイ報告と日本女性の性行動』春陽堂書店, 1954
- 藤林貞雄『性風土記』岩崎美術社, 1967
- 藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版, 2011
- マガジンハウス編『平凡パンチの時代』マガジンハウス, 1996
- 真木悠介『人間解放の理論のために』筑摩書房, 1971
- 松沢呉一『エロスの原風景 江戸時代～昭和50年代後半のエロ出版史』ポット出版, 2009
- 安田一郎『日本人の性行動』講談社, 1966
- ライヒ, ウィルヘルム, 中尾ハジメ訳『性と文化の革命』勁草書房, 1969
- ライヒ, ウィルヘルム, 小野泰博・藤澤敏雄訳『セクシュアル・レボリューション 文化革命における性』現代思潮社, 1970
- 礪川全次編『性愛の民俗学』批評社, 2007
- 我妻洋『性の実験』文春文庫, 文藝春秋社刊1980→1985
- 渡辺憲司『江戸遊女紀聞—売女とは呼ばせない』ゆまに書房, 2013
- Eder, Franz X, *Kultur der Begierde. Eine Geschichte der Sexualitaet*, Beck C. H., 2002.

## Brief History of Sexuality in Japan(1950 to 1980)

Maki HIRAYAMA

### ABSTRACT

This paper writes brief history of sexuality in Japan from 1950 to 1980, viewing broad range of sexuality-consciousness, norm, media, science and philosophy, and behavior. In this era in Western societies, “sexual revolution” as people’s active reform is thought to have occurred, but in Japan only “sexual liberation” but sexual revolution occurred. In modern Japan, there were two public spheres on sexuality, one was honourable and formal, influenced with modern Western culture, the other was hidden and informal, holding premodern Japanese customs. Adult men were to live in both spheres, but decent women were to live only in the former sphere. Commercial sex service and porns as hidden and informal public sphere developed in 1960’s and men came to realize any fantasies with commercial service more easily than ever. Sex of married couples became more erotic after WW II, but men and women had different background of public spheres, had communication gap, so the eroticization came to the limit. Many men thought sexuality as the issue in hidden and informal public sphere, so they hesitated from sex education, or science and philosophy on sexuality.

Keywords: sexual liberation, two public spheres on sexuality, communication gap between men and women